

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-83C	13-067	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名 (原題/訳)		
Alcohol intake over the life course and breast cancer survival in Western New York exposures and breast cancer (WEB) study: quantity and intensity of intake. WEB(Western New York exposures and breast cancer)研究における生涯アルコール摂取量と乳がん生存率：摂取量と飲酒の程度		
執筆者		
Weaver AM, McCann SE, Nie J, Edge SB, Nochajski TH, Russell M, Trevisan M, Freudenheim JL.		
掲載誌		
Breast Cancer Res Treat. 2013 May;139(1):245-53. doi: 10.1007/s10549-013-2533-y. Epub 2013 Apr 19.		
キーワード		PMID
乳がん、アルコール、生存、コホート研究		23605086
要 旨		
目的：		
アルコール摂取は乳がんの危険因子であるが、乳がんの生存者中で死亡率とアルコール摂取の関係については十分に検証されていない。		
方法：		
生涯飲酒歴から評価される全アルコールの摂取量と、ケースコントロール研究に参加した乳がんの女性(n=1,097)の全死因や乳がんの死亡率の関係について検討した。生存状態は2006年の国家死亡インデックス(National Death Index)で確認された。COX 比例ハザードモデルを用い、アルコールの摂取量に対する全死因と乳がんの死亡率のハザード比を計算した。生涯飲酒量と飲酒機会あたりの飲酒量および年齢別の飲酒状況について検証した。閉経の有無で層別化して分析した。		
結果：		
総飲酒量で調整後、生涯にわたって1日4杯以上のアルコールを摂取する閉経後の女性は、非飲酒者と比較し、全死亡のリスクがほぼ3倍であった(HR2.94、95%CI 1.31, 6.62)。乳がん死亡率についても有意ではないが同様の関係があった(HR2.68、95%CI,0.94, 7.67)。初経から初産の間の飲酒量が1杯以下の閉経後の女性の全死亡(HR 0.54, 95%CI 0.31, 0.95)や乳がん死亡率(HR 0.27, 95%CI 0.09, 0.77)のハザード比は有意に減少した。閉経前乳がん生存率は飲酒の程度とは関係がなかった。飲酒の状況、総飲酒量は乳がんもしくは全死亡との関連は無かった。		
結論：		
飲酒機会あたりのアルコール摂取量の多さは閉経後女性の乳がん生存率の減少と関連する可能性がある。初経から初産の間の少量飲酒は全死亡と乳がん死亡率に対して逆相関する可能性がある。この期間は乳がんの発達と乳がんに対する生存率にとって重要であると考えられる。アルコール摂取の絶対量よりも、飲酒の程度(飲酒機会あたりのアルコール摂取量の多さ)の方が乳がんの女性の生存率により重要な要因であること示唆される。		